

第57回愛知学院大学モーニングセミナー

「百人一首を詠んで
みませんか？」
一咲くやこの花の世界を楽しむ

愛知淑徳大学 文学部
教授 岩下 紀之

平成22年12月14日(火)
愛知学院大学楠元学舎110周年記念講堂

本日の講演内容

一 読み札の絵について

歌人たちの肖像に違いはない。となると
日本美術の伝統の最後の姿ということになる
市販の普通のカルタでは、どのようになっているか

二 和歌と古注釈について

古今の名歌を集めた百人一首は小さな和歌史のパノラマ
である。初期と後期では成り立ちがそれぞれ異なるの
を見てみよう。また、百人一首の注釈は室町時代にすでに
作られているが、少し不思議なことがある。

三 咲くやこの花の歌について

これは大変古い歌で、仁徳天皇に即位を勧めた王仁という
人が詠んだことになっている。この歌について近年、大きな
発見があり、その結果いろいろな学説が提起されている。

★「咲くやこの花」で気になったこと

梅 梅
干 干

どっちが正しい？



一読み札の絵について



肖像から解ること

参照

★島津忠夫氏

角川文庫『百人一首』 昭和四十四年

★吉海直人氏

『だれも知らなかった百人一首』（春秋社）

『百人一首カルタの世界』（新典社新書）

いずれも二〇〇八年

天皇の絵の特徴

臣下の絵との比較

天皇の称号について

日本紀略後編一

醍醐天皇

諱敦仁。亭子（宇多）天皇第一之子也。
母前女御從四位下藤原朝臣胤子。中納言高藤之女也。

日本紀略後編二

朱雀院

諱寬明。醍醐天皇第十一之子也。
母皇后藤原穩子。太政大臣昭宣公（基經）之女也。

日本紀略後編三

村上天皇

諱成明。醍醐天皇第十四之子也。母同_二朱雀院_一。

日本紀略後編五

冷泉院

諱憲平。村上天皇第二之子也。
母故皇后藤原安子。故右大臣師輔朝臣之女也。

日本紀略後編六

圓融院

諱守平。村上天皇第五之子也。
母贈皇太后藤原安子。故右大臣師輔朝臣之女也。



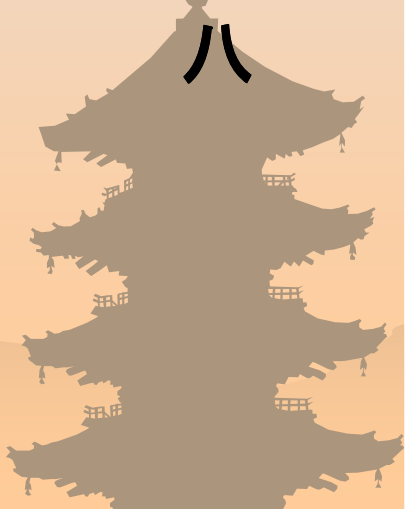
日本紀略後編八

華山院

諱師貞。冷泉院天皇第一之子也。

母故女御從三位藤原懷子。

故太政大臣謙德公(伊尹)之女也。



日本紀略後編九

一条院

諱懷仁。圓融天皇第一之子也。

母女御正四位下藤原詮子。攝政右大臣兼家公之女也。

日本紀略後編十二

三条院

諱居貞。冷泉院天皇第二之子也。

母故女御從四位上藤原朝臣超子。

故入道太政大臣兼家朝臣之女也。

日本紀略後編十三

後一条院

諱敦成。一条院天皇第二之子也。

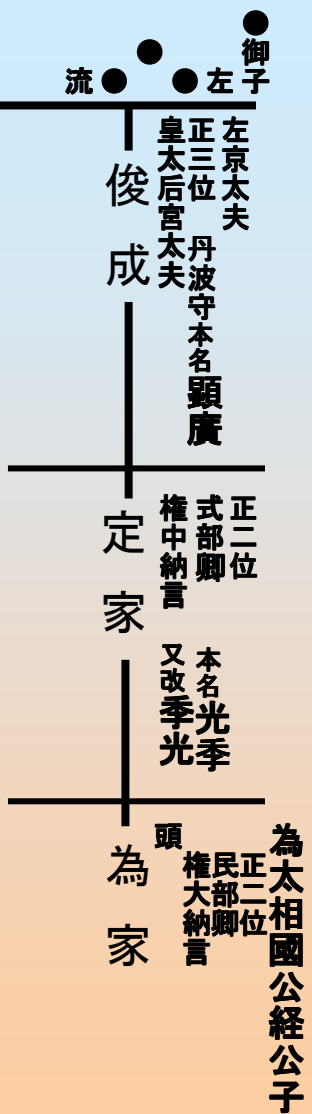
母皇太后藤原朝臣彰子。攝政左大臣道長朝臣第一女也。

公家衆の呼称

表記	実名	位	官
後京極摂政 前太政大臣 河原左大臣 鎌倉右大臣	藤原朝臣良経 源朝臣融 源朝臣実朝	従一位 従一位 正二位	摂政太政大臣 左大臣 右大臣
中納言家持 権中納言定家 従二位家隆	大伴宿禰家持 藤原朝臣定家 藤原朝臣家隆	従三位 正二位 従二位	中納言 権中納言 非参議
源俊頼朝臣 藤原清輔朝臣	源朝臣俊頼 藤原朝臣清輔	従四位上 正四位下	左京太夫 太皇太后大進
柿本人麻呂 紀貫之	柿本朝臣人麻呂 紀朝臣貫之	従五位上	木工頭

記録類での呼び方

尊卑分脈



公卿補任

建曆元年条(一二二一年)

從三位 京極藤定家^{五十} 九月八日叙。今日任侍從
故入道皇太后宮大夫俊成卿二男。母同成家卿

中右記

永長元年八月十五日（一〇九六年）



〔裏書〕

「郁芳門院々司、

右大将雅實卿・権大納言家忠卿・民了卿俊明卿・右衛門督俊實卿・

治了卿通俊卿・宰相中将保實・右兵衛督雅俊・宰相中将宗通、

為家朝臣・顕季朝臣・隆宗朝臣・為章朝臣・隆時朝臣・顕雅朝臣・

師隆朝臣・能俊朝臣・家範朝臣・國明朝臣

時範、五位別當
已上別當

俊兼五位、國仲子・藤原輔明、已上判官代、

藤盛輔・源有忠
兼雜色
惟輔子・源行實子、已上蔵人

公家日記の名称

伊地知鐵男『古文書学提要』

日記名	異称	記者	現存始終年表	発行状況と 収載叢書名等
網光公記 晴富宿禰記 宗賢卿記 大乘院寺社雜事記 有俊卿記 実遠公記 後知足院関白記 碧山日録 雅久宿禰記 斎藤親基日記 親元日記 後法興院記 糟粕記 広光卿記 親長卿記 実隆公記 言国卿記 資益王記 頼胤記 長興宿禰記	清宗賢記 (管見記) 房嗣公記	広橋網光 小槻晴富 広橋綱光 學尊・政覺・経尊 綾小路有俊 西園寺実遠 近衛房嗣 天極 小槻雅久 斎藤親基 蟻川親元 近衛政家 町広光 甘露寺親長 三条西実隆 山科言国 白川資益王 小槻頼胤 小槻長興	文安三(一四四六)〜文明八(一四七六) 文安三(一四四六)〜明応六(一四九七) 宝徳二(一四五〇)〜文明一(一四七九) 文安三(一四四六)〜明応六(一四九七) 亨徳二(一四五三)〜文明十四(一四八二) 亨徳三(一四五三)〜文明十四(一四八二) 長禄三(一四五九)〜文明十六(一四八四) 長禄三(一四四六)〜応仁二(一四六八) 寛正四(一四六三)〜文龜三(一五〇三) 寛正六(一四六五)〜応仁元(一四六七) 寛正六(一四六五)〜文明一七(一四八五) 文正元(一四六六)〜永正二(一五〇五) 応仁三(一四六九) 文明元(一四六九) 文明二(一四七〇)〜明応七(一四九八) 文明六(一四七四)〜天文五(一五三六) 文明六(一四七四)〜文龜二(一五〇二) 文明六(一四七四)〜文龜二(一五〇二) 文明七(一四七五)〜文明十(一四七八) 文明七(一四七五)〜長享二(一四八八)	〔刊〕 〔刊〕 群書・続大成 史誌・続大成 〔刊〕・続大成 大成 〔刊〕 伯家・続大成 集覧

二 和歌と古注釈について

たごの浦にうち出て見れば白妙の

ふじの高嶺に雪はふりつつ

おく山に紅葉ふみ分なく鹿の

こゑきく時ぞ秋はかなしき

契きなかたみに袖をしぼりつつ

すゑの松山波こさじとは

契りおきしさせもが露をいのちにて

あはれことしの秋もいぬめり

おほけなくうき世の民をおほふかな

我立袖に墨染の袖

君をおきてあだし心をわが持たば

末の松山波も越えなむ (古今 東歌)

なほ頼めしめじが原のさせも草わが世の中に

あらむ限りは (新古今 清水観音)

あのかたらさんみやくさんぼだいの

ほとけたちわが立つ袖に冥加あらせたまへ

(新古今 伝教大師)

古注釈の問題

奥書

宗祇抄

明応二年四月廿日

(一四九三年)

宗祇抄

かやうの事はきかねは事の外大事にきけは
あまり悪心うるにより人のくらゐもあさくなれる
事なりされはかきあらはしはんへらす

満基抄

応永拾三仲夏下旬(一四〇六年)

應永拾三仲夏下旬

藤原満基

満基抄

かやうのことはきかねは事外大事きけは
あまりやすく心うるにより人の信もあさくなれる
事也されはかきあらはし侍らす



三 咲くやこの花の歌について

犬養 隆氏 (2008年)

『木簡から探る和歌の起源』

万葉表記論

略体歌・非略体歌・作歌

稲岡耕二氏

「万葉表記論」 203～206ページ

天武九年(680年)以前

略体歌

持統三年(689年)以前

非略体歌

それ以降

作歌



春楊 葛山 発雲 立座 妹念

春楊葛城山にたつ雲の立ちても坐ゐても妹をしそ思ふ

卷十一 (万葉集二四五三番)

是量 恋物 知者 遠可見 有物

かくばかり恋ひむものそと知らませば遠く見るべく
ありけるものを

卷十一 (万葉集二三七二番)

玉響 昨夕 見物 今朝 可恋物

たまゆらに昨日ゆうべの夕見あしたしものを今日の朝あしたに恋ふべきものか

卷十一 (万葉集二三九一番)

嗚呼見乃浦尔 船乗為良武 女をとめ孀等之 珠裳乃須十二
四宝三都良武香

嗚呼見あみの浦をとめに船乗たまもりすらむ女をとめ孀たまもらが珠裳たまもの裾たまもに潮満つらむか
(万葉集四十番)

潮左為二 五十等児乃嶋辺 榜船荷 妹乘良六鹿 荒嶋廻乎

潮騒しほなみに伊良虞いなりの島辺しまみ漕ぐ船いもに妹乗いもるらむか荒しまみき島廻しまみを

(卷一 万葉集四十二番)



古今集序

難波津の歌はみかどのおほんはじめなり。
浅香山のことばはうねめのたはぶれより詠みて、
この二歌は歌のちちははのようにてぞ、手習ふ
人のはじめにもしける。

おほさざきのみかどをそへたてまつれる歌

難波津に咲くやこの花冬ごもりいまは春べと
咲くやこの花。

観音寺遺跡木簡（徳島県） 680年頃

奈爾波ツ爾作久矢己乃波奈

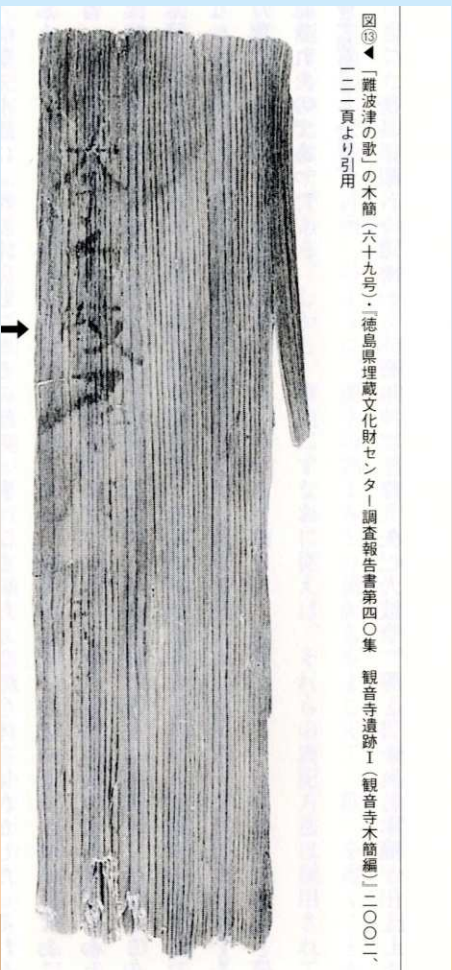


図13 ◀ 「難波津の歌」の木簡（六十九号）・徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第四〇集 観音寺遺跡Ⅰ（観音寺木簡編）二〇〇二
一一一頁より引用

百人一首もろもろ

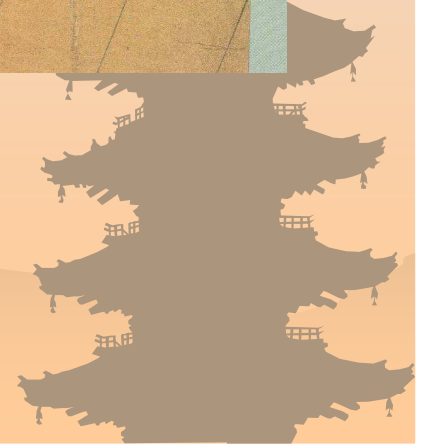






















申物言敷ら

6 うらくまのわをせりりーとくおの

ーろまをみまのあそけりりー

このおらくきれりーのりせむいぬ候りハ
らういせぬもやうれりハきまハ事の本
不事よまのハはまの思心うぬふり人れくの
まろくふ持ぬ事なりされハつあわりりーん
へらぬはすのく海ハ空ふかくなわて月もな

5 のーナン
6 にーナン
7 悪ーやすく
8 くらぬー信

ワラスケ

おらくまのわをせりりーとくおの
ろまをみまのあそけりりー
このおらくきれりーのりせむいぬ候りハ
らういせぬもやうれりハきまハ事の本
不事よまのハはまの思心うぬふり人れくの
まろくふ持ぬ事なりされハつあわりりーん
へらぬはすのく海ハ空ふかくなわて月もな

び一巻ハ奈州別平はのりわれ歌の説をうけて
まんくくふうをぬくくすと一海よみの三小同
傳トあはるふまのりーをま比古い傳しぬれま
まて明あふ伝と旅り小ねともなひわづ地
山北落とりーひ老はさうの袖をひよ和弁れ
んとらひ伝まはふふれりーやりーやりーめ
く侍執乃うみ乃むれひらとわりりーなひ
りんぬるなり

約産二年四月廿日

赤城玄判